

【PPP2008 : No. 7】

PPPの基本思想(5) -パートナーシップと公共性①-

【曖昧な公共性】

日々、公共性の言葉は、活発に利用される。「なぜ、行政が担わなければならないのか。公共性があるからだ。」「公共性のあることは行政が担うべきだ」、「公共性のあることは民間企業には任せられない。なぜならば、自己利益を追求するからだ」、こうした会話は良く耳にする。公務員志望者の面接でも「公共性のある仕事に就きたい」という志望動機が多く見受けられる。それでは「公共性とは何か」、問いかけると「社会や地域全体の利益」、「私的利益を追求しないこと」などあやふやな答えが多く返ってくる。「社会や地域全体の利益」、多様化する生活や価値観の中で全体の利益とは何か。謎は深まるばかりである。

「公」という言葉は極めて便利な言葉であり、このため日本では非常に多様に活用される。たとえば、戦時中の郵便局に「公と思う心がすでに敵」という標語が張り出された。これはどういう意味か。「公共のものと思うと私物化して無駄に使ってしまうので公共のものとは思わないでくれ」という意味である。自分のものは大切にすが、公共物は大切にしない。こうした現象は今日においても深刻化している。「滅私奉公」、もちろん、私を殺し公のために尽くす意味である。しかし、注意しなければならないのは「公共」という言葉の下で「滅公奉私」の実態となっていることも少なくない点である。花見の時期の公園の場所取り、一時的とはいえ公共の土地を明らかに私物化している。この場合の公園の「公」は誰が使ってもよい、その使い方は早い者勝ちと考えている。一方で、役所などの駐車場で「公用」と表示のある場所に車を止める人は少ない。なぜなら、この場合の「公」は行政、役所と暗黙のうちに決めているからである。

【公共性の定義】

公共性とは何か。「価値観の違う他者と関係を形成すること」である。ここで重要な点は、「価値観の違う他者」である。家族、親友、仲間の関係を公共性とは普通は表現しない。行政や民間を問わず、同じ組織、業界の中での関係を公共性とは呼ばない。なぜならば、価値観の違う他者ではなく、価値観を共有する他者だからである。公共性とは、自分の経験や知識では価値観が違うと思う人や組織などを認識するだけでなく、その他者が自分にとっても有用な存在として協力することである。この意味から、パートナーシップは公共性を担う基本であることが分かる。

社会資本、福祉、農業、分野を問わず自分たちの視点だけから主張したのでは公共性があるとはいえない。たとえば、社会資本整備と価値観の異なることが多い環境保護をいかに関係づけるか、高齢者政策を子育て政策といかに関係づけるか、行政と民間企業でいかに協力関係を形成するか、など異なる価値観の政策や考え方を結びつけることが公共性であり、行政が担うから公共性が担保されるわけではない。むしろ、縦割りで専門領域に仕切られた行政組織は、それぞれの分野の価値観で行動する。異なる価値観を結びつけることは、苦手な場合が少なくない。縦割りのタコ壺に入り込めば入り込むほど、行政は他の価値観を排除し公共性から遠い存在となる。

異なる価値観を結びつける仕組みを作り出すことが公共性の本質であり、結びつけるために市民、NPO、企業は大きな役割を果たす。そのことにより、様々な価値観からの異なる視点が融合し合って、

気づきである「異化機能」が発揮されることになる。

次回は、違った価値観を持つ他者どうしを結びつける協力関係、パートナーシップの形成の形態について整理する。